論文の内容の要旨

早稲田大学審査学位論文
博士（スポーツ科学）
概要書

高等学校の「体育に関する学科」及び「体育コース」の拡大過程に関する研究
—戦後学校体育史の再考—

A Study on the Expansion Process of “Departments on Physical Education” and “Physical Education Courses” in High Schools：
Reconsideration of Postwar School Physical Education History

２０２３年１月

早稲田大学大学院　スポーツ科学研究科
日髙　裕介
Hidaka, Yusuke

研究指導教員：　中澤　篤史　教授

論文の内容の要旨

本研究の目的は，戦後高校教育において体育学科及び体育コースがどのように拡大してきたのかを明らかにすることである．

日本では，スポーツ活動の機会が地域社会のスポーツクラブ等ではなく学校体育において提供されてきた．その学校体育が 21 世紀に入る前後から，学校教育においてスポーツを行うことのアカウンタビリティー（説明責任）を問われるようになった．そこで，本研究では，従来の戦後学校体育史のように普通教科「保健体育」あるいは運動部活動を対象にして考察しようとするのではなく，高校の体育学科及び体育コースを対象とした．体育学科及び体育コースというのは，「専門教科『体育』を中心としたカリキュラムが組まれている学科及びコース」のことである．端的にいえば，注目しようとするのは「高校学習指導要領解説保健体育編・体育編」の後者である「体育編」で示される「体育」は一体何なのかということである．体育学科及び体育コースの性質を確認すると，「専門」的なスポーツ活動が「制度」として成り立っていることが指摘できる．この点でいえば，普通教科「保健体育」は，「一般」的なスポーツ活動が「制度」として成り立っているという性質があり，運動部活動は，「専門」的なスポーツ活動ではあるものの「非制度」であるという性質を持つ．そのため，普通教科「保健体育」と運動部活動では持ち合わせていなかった性質を兼ね備えた体育学科及び体育コースが高校教育の中で，あるいは社会状況の中で必要とされ存立してきたと考えられる．そこで，本研究では，体育学科及び体育コースがいつから，なぜ，どのように作り上げられてきたのかを明らかにすることを目的とする．そして，体育学科及び体育コースの拡大過程を戦後学校体育史に位置づけ，戦後学校体育史の再考を試みる．

以上の問題関心と目的を下にして，本研究は以下の通り構成された．各章の概要を示す．

第 1 章では，本研究の目的と基本的な枠組みについて論じた．上述の目的を達成するために体育学科及び体育コースを高校教育制度と設置校の設置理由の相互関係を捉えていくという分析の枠組みを提示した．そのため，本研究では設置校の『学校史誌』（記念誌や学校要覧など）を分析の中心的な資料として用いた．蒐集した資料は，各章の中で提示する．

第 2 章では，高校の体育学科及び体育コースの拡大過程を理解するための基礎的な分析を行った．体育学科及び体育コースの量的変遷と政策展開から第 3 章から第 5 章で分析すべき具体的な課題を抽出した．

第 3 章では，東京都立駒場高校保健体育科の設置過程を明らかにした．前身校である東京府立第三高等女学校では体育に理解のある土壌が形成されていた．その上で，第 6 代校長の長倉邦雄が戦後復興期において体育運動を奨励するというよりも，健康・衛生という人間の発達

の基礎となる面を重視し，保健体育科を設置していた．つまり，都立駒場高校保健体育科は，体育運動を活発に行うというよりも長倉の教育理念によって，戦後復興期に必要な健康・衛生の側面を促進していくために設置されたのであった．

第 4 章では，なぜ高校学習指導要領に専門教科「体育」の目標・内容が明記されていない中で，体育学科及び体育コースが設置されたのかを明らかにした． 1960・1970 年代に体育学科及び体育コースを設置した 34 校の学校史誌を分析した結果 5 つの設置理由が導かれた．それを検討してみると，体育学科及び体育コースは，高校教育状況や社会体育への需要の高まり，競技大会の開催など外部状況の変動に対応するために，高校が独自の文脈の中で自主的に設置していた．

第 5 章では，1980・1990 年代に高校学習指導要領に専門教科「体育」の目標・内容が明記されて以降，どのように体育学科及び体育コースが設置されたのかを明らかにした上で，なぜ体育学科及び体育コースが急増したのかについて考察した．1978 年までには，35 校の体育学科及び体育コースの設置数だったが，2000 年には 244 校と約 7 倍に増加していた．これらの学校史誌を分析した．体育学科が急増しなかった理由は，大学進学の道が競技実績による専門的なあり方に限定されていたことが指摘できた．一方で，体育コースは，普通科体育コースとして，競技成績による進学も保障しながら，一般受験による進学の道も用意されていたため，体育学科以上に急増していったことを明らかにした．最後に，なぜ 1960・1970 年代の多様な設置理由から，1980・1990 年代の「競技者の育成」，「運動部活動の強化」という設置理由に変動していったについて考察した．その結果，「競技能力」による進学システムの構築を制度的に担うことができたのが体育学科及び体育コースであったため，体育学科及び体育コースの設置理由は「運動部活動の強化」，「競技者の育成」に収斂していったと考察した．

第 6 章では，本研究の結論をまとめた．高校の体育学科及び体育コースの拡大過程については，高校教育政策によって体育学科及び体育コースの設置が要請されてきたことを土台にして，その要請を高校側が，専門教科「体育」を「競技能力を高めること」として意味づけする過程であったことを指摘した．こうした拡大過程を踏まえて，戦後学校体育史に体育学科及び体育コースを位置づけて再考した．多くの生徒が経験する普通教科「保健体育」や運動部活動の中心領域でなされる教育的価値が守られるために，戦後新たに周辺領域として体育学科及び体育コースが制度となって生み出されたと指摘した．

以上を結論として，最後に本研究の残された課題と今後の展望を述べてまとめとした．